

スワンの羽

名瀬市立朝日中学校 3年 椿 友舞

あるところに、あなたのお父さんもお母さんもおじいちゃんもおばあちゃんも、わからないあるところに、それはたいそう変わった白鳥がいた。

白鳥の名は、スワンという。

スワンは、一人ぼっちだった・・・いや、一羽ぼっちというべきであろうか。とにかく、仲間はいなかった。いじめられていたのである。なぜなら、スワンの羽は、他の白鳥と違ってピンク色だからである。なぜピンク色だといじめられるんだ。きれいいじゃないか、と思う純粋な方のために説明をしよう。

人間・・・いや、全ての生き物の中には、自分と大きく違っている仲間を、違いすぎて怖くなり、からかったり、いじめたりしてしまうという弱い者もいるのだ。スワンは、なんとも不幸なことに、そんな兄弟たちにいじめられていた。そして、いつのまにか群れから離れてしまったのだった。

「なんで、僕は、こんな色なんだろう。」

スワンは、人が遠くから見ても大きな桃かと思うぐらいピンクだったので、人間にもよくいたずらされた。だからスワンは、人目につかない湖の端を、自分の寝床としていた。スワンは、夜になると、いつも涙を流しながらくちばしで自分の羽を一本ちぎる。毎日、毎日。一本ずつ。スワンの寝床には、羽がいっぱいあった。それを知っているのは、スワンだって気づかないくらい小さなアメンボだけだった。

「ねえ、君は何でそんなことしてるの？」

ある日、いつもどおりスワンが羽をちぎっているとき、アメンボは声をかけた。

「だ、誰？どこにいるの？」

スワンは、あたりをキョロキョロと見わたすが、それらしきものはいなかった。

「ここだよ。」

スワンは、声のするあたりを目を凝らしてよく見た。そこで、スワンはやっと気づいた。そこには、小さなアメンボがいた。

「ねえ、何でそんなことしているの？」

アメンボは、しつこくもう一回聞いた。

「僕は・・・僕は、この羽が大嫌いなんだ。こんな気持ち悪い色をして。だから、こんな羽なんか無くなってしまえばいいと思ってるんだ。」

アメンボは、きょとんとした目を見た。

「どうして、すごくきれいな羽じゃない。それに暖かそう。」

アメンボは、スワンの羽を褒めちぎった。でも、スワンは聞く耳を持たなかった。

「ねえ、さっきちぎった君の羽。一本ちょうだい。僕には羽がないから。君の羽が欲しいんだ。いい。」

「え、この羽を欲しいの。変わってるね。」

「お願い。」

「いいよ。もって帰りなよ。」

「ありがとう。」

そう言うと、アメンボは、湖に浮かんでいるスワンの羽を持った。

「あ、全部持って行っていいよ。見るのも嫌なんだ。」

スワンはそう言って羽を持ってあげた。アメンボが持てる羽は、3本が限界だったから。

「ありがとう。」

アメンボは、嬉しそうに、そして悲しそうに微笑んだ。

アメンボの家は、スワンには少し狭かった。もっとも、アメンボにとっては広すぎるが。家といっても、スワンが住んでいる湖の端っこで、草で囲まれているだけのものだった。でも、その家は、スワンの家に似ていて、スワンは落ち着く気がした。

「ちょっと狭いんだ。ごめん。でも、入れないことはないね。」

「うん。大丈夫だよ。君こそ、僕に踏まれないようにね。」

スワンは、細心の注意を払った。アメンボは小さくて、踏んでも気がつかないと思ったからだ。

「ここに置いてくれるかな。」

アメンボは、羽を置く位置を指定した。スワンからみれば、どこに置いても同じように見えたが、アメンボにはなんらかの考えがあったのだろう。多分、この位置だと、太陽が当たるのではないだろうか。なかなか頭のいいアメンボだった。そんなことにも気づかないスワンは、疑問も持たずに言われるままにそこに羽を置いた。ピンクの羽は、一瞬ふわっと舞い上がった。きれいだった。スワンは遠い目でそれを見ていた。ひらひらと、湖の上に浮かぶ。遠くから見れば、珍しい花に見えただろう。ベッドができた。アメンボは、そこに乗る。羽のベッドは、少し浮いたり沈んだりした後、アメンボを優しく包み込んだ。

「柔らかいし・・・それにとても暖かい。最高なベッドだ。」

アメンボの目に、うそは無かった。

「こんな羽に囲まれて暮らせる君は幸せ者だね。」

スワンは答えなかった。

「本当にありがとう。今日は、もう遅いから帰った方がいいと思うけど、明日になったら遊ぼうよ。明日、君の家に行ってもいい。」

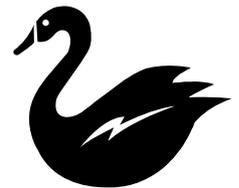
スワンは、最初戸惑ったが、すこしすると、笑顔になってこう答えた。

「いいよ。明日、遊ぼう。」

スワンは、自分の家に着いた。いつもならとっくに寝ている時間だった。スワンの家は、きれいさっぱりなにも無くなっていた。スワンの家には、スワンが毎日ちぎっていた羽しかなかったからだ。それが一気に片付いたものだから、家はいつもより寂しく見えた。スワンは目をそらし、上を見た。月が明るかった。やはり涙がでてきた。そしてスワンはやはり羽を一本ちぎった。何も無かった湖に、羽が一本浮かんだ。

次の日、アメンボは約束どおり遊びに来た。湖に浮かぶ羽を見たが、アメンボは何も言わなかった。ただ、悲しそうな顔をした。

アメンボの話は面白い。頭のいいアメンボだから次々と話を思いつく。話すの



は苦手なスワンもアメンボと話しているととても楽しかった。ネコに見つかり、いたずらされそうになった話。人間に息を吹きかけられた話。水の中のイロイロな生き物の話・・・その全てを面白おかしく語ってくれた。スワンは、その度に涙を流すほど笑った。こんなことで涙を流すのは、初めてだった。

「そこで、僕はイルカと出会ったんだ。」

アメンボの話は、本当かうそかわからない。でも、そこがよけい面白かった。そして、スワンは本当かうそかも、深く追及はしなかった。アメンボは、

「世界中を旅してまわっているんだ。」

と言った。アメンボの目にうそはなかった。

2人 2匹というべきであろうか。とにかく、スワンとアメンボは、気の合う親友になった。アメンボといると、時間がたつのが早くなった。それと同時に、羽のことも気にならなくなった。しかし、夜になり一人になると、やはりスワンの目からは涙があふれた。羽もやはり一日一本ちぎっていた。アメンボがスワンの家に来るたびに、落ちてる羽は一本ずつ増えていた。そして、スワンはそれをおみやげと言ってアメンボに一日一本あげていった。アメンボは、あまり喜ばなかった。それどころか、とても悲しそうな顔をした。そして小さく

「ありがとう。」

というだけであった。

その日は、体の痛みで目が覚めた。いつもとかわらない一日だった。湖も。周りの風景も。温度も。でも、スワンには、特別寒く感じられた。スワンの体は、いつもとは違った。まず、体のあちらこちらが痛い。とても痛い。そして、凍えるほど寒い。とてつもなく寒い。スワンは湖に写る自分の姿を見た。そこには、羽がほとんど抜け、ところどころに羽が生えたみすぼらしい自分が写っていた。スワンは驚いた。また、一本羽が抜け落ちた。周りを見ると、昨夜抜けたであろうスワンの羽が大量に浮いていた。寒くてたまらないスワンは、いそいで羽を集め、自分の体にくっつけようとした。しかし、羽はすぐに落ちてしまい、スワンのうすピンクの地肌があらわになった。

「痛い・・・体中が痛いよー。」

スワンは縮むと体をこすった。効果はあまりみられなかった。涙があふれた。泣かずにはいられなかった。また、羽は一本抜け、涙の量も増えた。スワンは、抜け落ちた羽をじいーっと見つめた。とても暖かそうだった。初めて羽が恋しくなり、今まで自分がしてきた行動を後悔した。ちぎってきた羽を戻せるものなら戻したかった。体より心が痛かった。

「大丈夫？ほら、早く。」

アメンボの声がした。閉じてしまいそううつろな目に全神経を集めるとアメンボが見上げていた。

「あ・・・。」

声がほとんどでなかった。

「遊びにきたんだ。ビックリしたよ。大丈夫？ねえ、早く僕の家においでよ。ここは少し寒い。」

いわれるままに、ゆっくりと泳いだ。体中が痛かったが、このままここにいる

と死んでしまいそうだった。スワンにとって、アメンボは大きな希望に見えた。

アメンボの家について。アメンボの家に来たのは、最初の日以来、二回目だった。

「ほら、そこのベッドに寝て。」

そこには、スワンの羽で作ったベッドがあった。前に見たとき以来、毎日一本ずつ羽をあげていたから、ベッドはアメンボには大きすぎる大きさになっていた。ふらふらとベッドに倒れると羽がふわっと舞った。きれいだった。暖かだった。柔らかかった。心の痛み、体の痛み、寒さがなくなってきた。

「君の病気だったら、三日くらい暖かいところにいたら治ると思うよ。前、旅の途中であったウサギが同じ病気にかかっていた。体中が痛いだろう？」

スワンは力無くうなずいた。

「明日には、症状は軽くなって、三日たてば元の体調に戻るだろう。ただ・・・君の羽は・・・」

スワンはアメンボを見た。真剣な顔だった。

「一年はしないと、きれいにそろわないだろうね。でも！それでもいいほうなんだ。一生生えなくなる場合もあるんだから。君は・・・君の羽はとてもきれいだ。今、分かっただろう、今度生えてくる羽は大事にするんだよ。」

スワンの目から一粒涙がこぼれた。

「僕は旅にでるよ。僕の体は小さいから君の病気がうつったら、すぐに死んでしまうからね。」

スワンは、ゆっくりとアメンボを見た。アメンボは笑っていた。

「また、会おう。」

スワンは声が出なかった。いかないでほしかった。アメンボは後ろを向いて進んだ。振り返らなかった。アメンボは、だんだん小さくなって、そして消えた。そのときには、スワンの目は涙でゆがんでいた。スワンは泣いた。いじめられたときよりも。毎日寝る前に泣いたときよりも。アメンボの話聞いて笑いながら泣いたときよりも。その何百倍も泣いた。初めての友達だった。アメンボは、かけがえのない友達だった。

羽のベッドの暖かさに包まれて、目が覚めた。昨日、いつのまにか寝ていた。アメンボが言ったとおり、痛みはとれた。寒くもなかった。昨日の出来事が嘘みたいだった。でも、間違いなく体に羽は無く、アメンボもいなかった。また、涙がでそうだったが、がんばってこらえた。

一年後。

スワンの羽は、きれいに生えそろった。あの出来事から、心が強くなった。小さなことでくよくよしなくなったスワンに、新しい友達もできた。今度の友達は、スワンの羽のことでいじめたりしなかった。スワンは、とても幸せだった。夜に泣く事も、羽をちぎることもしなくなった。一生この羽を大事にしようと思心に決めていた。

あの日以来、スワンはアメンボの家に住んでいた。友達と別れて、スワンが帰ってくると、そこにはいた。アメンボがいた。アメンボはスワンを見て笑った。スワンは、アメンボを見て涙が出そうになったが、こらえて笑った。